学校名	鳥取県立鳥取養護学校
取組の名称	「たくましく生きる力」を育むための教職員と連携を深めた取組

１　本校の実態

本校は約 6 割の児童生徒が複数の障がいを有している。また、半数の児童生徒は、看護師が行う医療的ケアが必要であり、それぞれの障がいや疾患は多様化している。給食の形態は、普通食が 30 名、特別食が 12 名となっており、このほか経管栄養のみの児童生徒も 12 名いる。障がいの特性によるこだわりや感覚過敏、生活経験の少なさ、生活環境などから食生活に偏りがある児童生徒が多く見られる。

特別食は、児童生徒の実態に応じて刻み食、粒ありペースト食、ペースト食、ゼリー食（かため・ふつう・やわらかめ）に区分して提供している。コロッケやポテトサラダなど、でんぷん質が多いおかずのゼリー食は、べたつきが残ったり、やわらかくなったりするなど、仕上がりに課題がある。

令和 3 年度実施の教職員アンケートの結果では、「教科等において食育を位置付けた学習に取り組むことができたか」「栄養教諭・学校栄養職員と連携し、指導に取り組むことができたか」という問いに対する肯定的な回答は、前者では 45%、後者では 35%であった。このことから、本校教職員においては、食育の推進や、栄養教諭等との連携に対する意識に課題があると考えられる。

２　ねらい

本校の実態から、まず、食生活に偏りがある児童生徒に対して、児童生徒自身に食べ物への興味関心を持ってもらい、咀嚼・嚥下を意識しながらしっかり食べられるようにすることや、自らの食生活を管理するための能力を身に付けさせることが必要であると考えた。また、特別食については、安定した食形態での給食提供に向けて再調理方法を工夫することが重要であると考えた。併せて、教職員の食育に対する意識を変容させ、学校全体で食育を推進するためには、栄養教諭の専門性を発揮しながら、教職員との連携を強化し、指導を進めていくことが重要であると考えた。

３　具体的な取組内容

(1) 児童生徒の食への関心を高める工夫

しょクイズラリーの実施（食育月間）

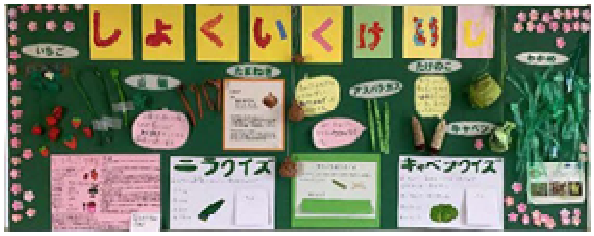
校内に掲示した食育クイズを解いて回る「しょクイズラリー」を実施し、ゴールを給食室にすることで、普段給食室に来ることの少ない児童生徒や新入生に来てもらいやすくなるように工夫した。また、実施に当たっては、教職員としょクイズラリーについて共通理解を図りつつ、児童生徒の実態把握や、食に関する指導について確認するなど、教職員との連携強化に努めた。

給食の時間における指導

主に、旬の食材や、鳥取県の食材についての興味や知識を深めることを目的として取り組んだ。単一障がい学級には、週に 1 回程度、給食に使用されている食材に関するクイズ「しょクイズ」、重複障がい学級には、給食に使われている食材のマスコットを活用した指導を計画的に実施している。給食を食べていない学級にも旬の食材のマスコットを活用した指導を実施した。

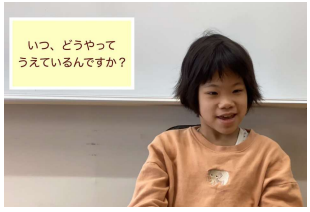
ハッピーランチグループ（委員会）の活動

児童生徒玄関近くの食育掲示板に、旬の食べ物や鳥取県産の食べ物の模型、クイズを作り掲示した。児童生徒の個性があふれる、にぎやかな掲示板に仕上がった。



また、毎月の食育の日には、本校で実施している「とっとりカレー献立」に使われている旬の鳥取県産食材について校内放送で紹介した。9 月 12 日のとっとり県民の日、1 月の全国学校給食週間にも同様に実施した。

けんこうルームの開設



養護教諭と連携し、健康教育に関する実態把握のためのアンケート調査や、各学級への健康教育動画の配信を目的とした「けんこうルーム」（Google Classroom）を作成した。給食室からは、夏休み中の教職員の食事から栄養バランスについて考える動画「とつげき！夏休みのお昼ご飯」や、児童生徒からの質問を生産者の方から回答してもらう動画「白ねぎの秘密にせまる」など、月に 1 本程度の動画を配信した。また、いつでも栄養教諭・養護教諭に個別に質問や相談ができるコーナー「トリトーーク」を設けた。

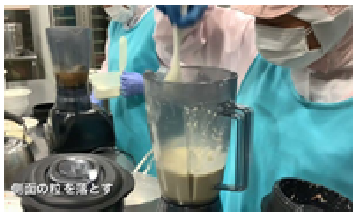
(2) 安定した食形態の工夫

再調理レシピの見直しと記録

特に課題のあるゼリー食について、再調理レシピの見直しを行った。コロッケやポテトサラダなどのでんぷん質が多いおかずのゼリー食については、食形態を維持したまま、べたつきを抑えた仕上がりになるように、ゲル化剤の配合を変えて試作を重ねた。また、過去 5 年分の記録をデータ化し、過去のデータをもとにゲル化剤の適切な量を指示できるようにした。

さらに、再調理の手順書に加えて再調理の様子を動画に記録しておくことで、担当者が代わっても適切な調理ができるようにした。

併せて、新メニューの導入時にも、保護者からの申請に沿った食形態になるように、試作を重ねて提供した。



言語聴覚士との連携

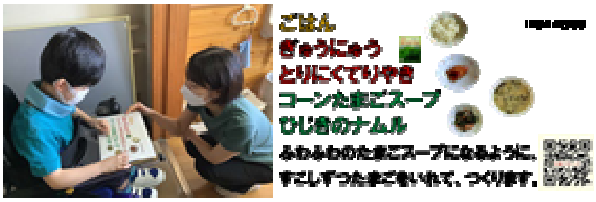
児童生徒が食形態を変更する際には、保護者や担任に加え、児童生徒を担当する外部機関の言語聴覚士等とも連携して試食を実施し、食形態が児童生徒の実態に合ったものとなるようにしている。

災害時や人員不足時のための非常食についても試食や情報交換を重ね、準備を進めた。

(3) 教科等の指導における教職員連携の工夫

食に関する指導の全体計画②に沿って、担任や教科担任と連携し、計画的に実施した。

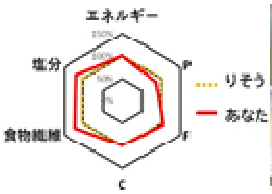
献立確認（日常生活の指導）



朝活動の時間を活用し、児童生徒が、給食室に「今日の献立」を取りに来る活動を続けている。「今日の献立」には、おかずの写真と献立名を記載している。栄養教諭・学校栄養職員は、「今日の献立」を取りに来た児童生徒に、献立のおすすめポイントを紹介したり、おすすめ食材のマスコットの貸出

しをしたりしている。給食室まで来られない学級は、児童生徒が事務室から受け取ったり、各学級内で献立の確認をしたりしている。「今日の献立」には、献立に関する穴埋めクイズや、短い動画の二次元コード等のひとことメッセージを記載し、他の学級も活用できるようにした。

給食の献立を考えよう（小学部・家庭科）



エクセルのグラフシートを活用し、給食の献立を作成する授業を行った。児童は、「食べたいものを組み合わせたら脂質が多くなった。」「麦ごはんにすると食物繊維が多くなった。」など、料理の組合せによって変わるグラフを興味深く見て取り組んでいた。児童が考えた献立は、実際に給食で提供した。

中食について考えよう（高等部・家庭科）

卒業後の食生活の自立を見据え、中食について学習した。市販されている弁当を給食の食器に移し替え、給食と見比べることで問題点に気付き、改善のための工夫を考えることを目的とした。「給食と比べて色が濃い」「彩りが良くない」「副菜の皿が空になっている」などの意見があり、健康的な食事の手本である給食に近づけるための方法を考えていた。

重複障がい学級においては、食べ物への興味関心を高めることを目標として、継続した指導となるよう取り組み、単一障がい学級においては、児童生徒が自ら学び発信する活動や、実生活につなげることができる実践的な活動を重視して取り組んだ。

４ 成果

(1) 児童生徒の変容

さまざまな場面での食に関する指導を継続したことで、児童生徒に変化が見られた。教職員アンケートの結果によると、「厳しい偏食がある児童の食べられるものが少しずつ増えてきた。」「家庭で料理をするようになった。」「朝食を食べることに気持ちが向いて、朝食を食べてきた日があった。」など、偏食や食生活の改善に向かった様子が見られた。生徒の中には、食に興味を持ち、食事量が増えたことから、間食や胃ろうからの栄養補助を中止し、給食だけで日中を過ごすことができるようになった例もあった。保護者からも「苦手だった野菜を食べられることが増えて嬉しい。」という声があった。

また、朝活動では、初めは献立を受け取るだけだった児童が、「ツナってなんですか？」「にんじんはからだをまもる」などと話すようになり、食べ物への興味関心の高まりが見られた。今まで給食室を訪ねることがなかった児童生徒も、「今日の給食が楽しみ。」「今日の給食がおいしかったので、作り方を教えてください。」と来るようになったり、「早く次のクイズをしに来てください。」と廊下で声をかけてくるようになったりするなど、給食を通じた関わりが増えているように感じた。

(2) 再調理方法の改善

過去のデータに基づき、再調理の見直しを行うことで安定した状態で提供できることが増えた。また、コロッケやポテトサラダなどのべたつきが気になる献立の形態が改善され、今まで避けてきた芋類を使った献立も新メニューとして取り入れることができるようになった。担任からは、「以前はコロッケが完食できない日もあったが、べたつきが減り、食べられるようになった。」という感想があった。保護者からも、「安心して給食を食べることができた。」という声が聞かれるなど、食形態の工夫と担任・保護者・言語聴覚士との連携により、食べられる量を増やすことができた例があった。

(3)教職員との連携の深まり

食に関する指導の全体計画に沿って、栄養教諭から授業内容の提案や、授業に関連した献立を提供することができた。教職員アンケートの結果を令和 3 年度と比較すると、「教科等において食育を位置付けた学習に取り組むこと」に対する肯定的な評価が 45%から 60%に増加、「教科等において、栄養教諭・学校栄養職員と連携し、指導に取り組むこと」に対する評価も 34%から 52%に増加した。

また、栄養教諭の授業参加時数も、令和元年度と比較すると増加している。「学習の最後に栄養教諭からの説明があることで、知識や理解が深まった。」という声が聞かれるなど、専門性を生かした授業が評価されてきていると考えられる。

５ 課題

本主題に掲げた「たくましく生きる力」を育てるためには、児童生徒の目標達成に向け教科横断的な視点を持ち、学習内容を系統的に整理することが必要である。引き続き教職員と連携し、全体計画の評価・改善・次年度へ向けた計画など、共通理解を図ることが重要である。

また、児童生徒が健康的な食生活を築いていくためには、保護者との連携が不可欠である。保護者へのアプローチも含め、個別的な相談指導を充実させていくことが必要である。